

〈連帯〉に安息する昔男

——伊勢物語二八〜四八段に見る〈孤高〉からの脱却——

田 口 尚 幸

一 序

「原体験へと回帰する昔男―伊勢物語一〜二〇段に見る〈心〉と〈かたち〉の二元論―」（注1）からはじまった伊勢物語の配列順相補的解釈は、「イロゴノミとして成長する昔男―伊勢物語二一〜三七段に見る積層構造―」（注2）へとつづき、今回が三本目になる。

相補的解釈の有用性に関しては「伊勢物語の相補的解釈―その序説としての試論―」（注3）や「成立論から相補論へ―新世紀の伊勢物語研究―」（注4）のなかで既に示したので詳述しないが、簡単に言えば、成立論的解釈で軽視されてきた章段や部分を他と相補的に繋ぐことで伊勢物語がよりおもしろく読める、ということだ（注5）。成立論的解釈は、初原的・中核的と考えるいわばおしいような章段ばかりを賞味し、後補的・周辺的と考えるいわば付録の章段に対しては

その質的変貌を説くにとどまっている。大味な主要章段贅美と、信頼性を欠く成立論的時間軸にもとづいた群小章段排除。成立論者は結局読めてはいない。相補論では、たとえその章段が初原的だろうが、後補的だろうが、区別しない（注6）。どのような章段でも、同一平面上で他章段と繋ぎ合わせる。そうすれば、複雑玄妙な味が確認できるはずだ。

今、群小章段が重要だ。これらを繋ぐところに芸を見せたい。三八〜四八段もまた群小章段が多く、しかも、各章段の連続性は見出しにくい。素材が素材だけに、前回の二一〜三七段同様、今回も正念場だ。

二 三八〜四八段というまとめ

はじめに、三八〜四八段を一まとめとした理由を、前の章段群（一〜二〇段・二一〜三七段）からの流れを踏まえつ

つ、確認しておく。

一〇二〇段は、昔男がどいう価値観をもっているかを認識した章段群だった。没落してもなおミヤビを失わない者に惹かれ、自らもそうした生き方を志向する昔男。高子との恋は破局に終わり、「京にありわびて」東下りするものの、そういう曲折を経た後に紀有常や大和の女らのミヤビに共感し、進むべき方角に曙光を見出す。二一〇三七段は、イロゴノミとしての強さを獲得した章段群だった。ストリートに想いを告げる強さと、愛を貫き通す強さを具備する昔男。女のあつかいに失敗を繰り返し、惨めなまでのいたらくを一時的に見せはするが、その後、凜然たる強さを身に纏い復活する。

一〇二〇段も、二一〇三七段も、内容的にまとまっている。内容的なまとまりだけではない。配列面でもはじめとおわりのキリのよさが認められる。一段の大和の姉妹と二〇段の大和の女の相似、二二段の強さと三五〇三七段の強さの一致（二二段は章段群冒頭の二一段と対照構造）。一応の回帰構造が成り立っている。配列上、一区切りできるのだ。

三八〇四八段はどうか。

内容的には、〈連帯〉を希求する昔男の姿が一貫して描かれている。一〇二〇段や二一〇三七段にも時として友愛や恋慕の情が描かれてはいたが、三八〇四八段は一貫している。昔男は様々な人たちと精神的繋がり〓〈連帯〉をもとうとしている。あるいは、〈連帯〉できないことを嘆いている。こ

こには、かつて田舎女を否定したような、相手を審査する厳しきはない。深い悶柄とも言えない相手に対しても、あくまでも優しい。そうなった理由は、会えないがゆえに人恋しさを痛感した、という章段群冒頭の三八段の昔男の歌に端的に示されている。これまで昔男はもがいてきた。自己のアイデンティティーを自問し、時に妥協を拒み、時に共感し合い、挫折と成長を繰り返してきた。三七段までは、浮沈と明滅の記録だったと言える。ある程度の成長を遂げた今、昔男は〈連帯〉を希求し、〈孤高〉から脱却する。四〇段で自らを「翁」と語るのも、きざわしい自己形成の道程が終極を迎えたからだろう。三八〇四八段という章段群は、昔男という一人の人間の角と張りがとれ、〈連帯〉のなかに安息してくさまを描いている。そういう章段群としてなら、配列上この位置にあってふさわしい。

回帰構造という点では、三八段と四八段は驚くほどの相似を見せる。三八段は、外出して会えなかった紀有常に対して、おかげで「恋」を知った、と昔男が詠みかける話だ。

昔、紀有常がいききたるに、歩いておそく来けるに、よみてやりける。

君により思ひならひぬ世の中の人はこれをや恋といふらむ

返し、

ならばねば世の人ごとにをかも恋とはいふと問

ひし我しも

四八段では、やはり会えなかつた誰かに対し、おかげで「待つこと」の「苦し」さ知つた、女のところへは途絶えることなく訪ねて行ってやるべきだった、と詠んでいる。

昔、男ありけり。馬のはなむけせむとて、人を待ちけるに、来ざりければ、

今ぞ知る苦しきものと人待たむ里をばかれず訪ふべかりけり

両段の共通性から回帰構造を認めることは至極自然だ。はじめとおわりのキリのよさも確認できた。

内容から見ても、回帰構造から見ても、三八〜四八段は一まとまりと見なせるはずだ。

なお、三八〜四八段において、はじめの三八段とおわりの四八段は、三九〜四七段をかこむフレームとして機能していると言える。三八段は、待たされることによって恋とは何かを考る、きっかけとなる章段だ。四八段は、三九〜四七段の経験を経て、待つことの苦しさや、他に優しくあらねばという博愛精神をより実感する章段だ。三八段より微妙に内容が深化しているのは、三九〜四七段における経験を受けているからだろう。

では、以下、三八〜四〇段・四一〜四三段・四四〜四八段の三つに分けて論じていく。

三 イロゴノミたちとの〈連帯〉

源氏物語の雨夜の品定めを想像されたい。当代きつてのイロゴノミたちが集まって女の品定めをする例の場面。私は、あれに近い雰囲気をつくりだしている。

まず、三八段から。この段は、前掲したとおり、昔男と有常との軽妙な歌の贈答からなる。有常の人となりは、既に一六段で紹介されている。

人からは心うつくしく、あてはかなることを好みて、こ
と人にも似ず。貧しく経ても、なほ昔よかりし時の心な
がら、世の常のことも知らず。

彼は八二段にも登場し、惟喬親王グループの一員として風流世界に遊ぶ。前掲した「原体験へと回帰する昔男」や「伊勢物語の相補的解釈」などでは、彼を昔男の盟友として位置づいた。昔男と同種の痩せ我慢のミヤビをもつゆえに、昔男と共に感じ合ひながら〈連帯〉している人物と見なした。その彼がこの章段群の冒頭に登場するのは興味深い。〈連帯〉を描くとすればまず思い浮かぶ人物だからだ。女との恋の遍歴は示されないものの、風流ぶりからして恋の練達と見ることは許されるだろう。三八段では、昔男も、有常も、「恋」という感情を今まで知らなかった、と詠む。もちろんアイロニーだ。詠者がイロゴノミどうしだからこそ、洒落が効いている。スノッパな雰囲気なのかなとちとける二人の姿がある。

三九段を見てみよう。

昔、西院の帝と申す帝おはしましけり。その帝のみこ、崇子と申すいまそかりけり。そのみこうせ給ひて、御葬の夜、その宮の隣なりける男、御葬見むとて、女車にあひ乗りて出でたりけり。いと久しう率て出で奉らず。うち泣きて止みぬべかりける間に、天の下の色好み、源至といふ人、これももの見るに、この車を女車と見て、寄り来て、とかくなまめく間に、かの至、螢をとりにて、女の車に入れたりけるを、車なりける人、「この螢のともす火にや見ゆらむ、ともし消ちなむずる」とて、乗れる男のよめる。

出でて去なばかぎりなるべみともし消ち年経ぬるか
と泣く声を聞け

かの至、返し、

いとあはれ泣くぞ聞ゆるともし消ち消ゆるものとも
我は知らずな

天の下の色好みの歌にては、なほぞありける。至は順がおほぢなり。みこのほいなし。

既に書いたことだが（注7）、至は非難されているわけではない。伊勢物語全体を見渡してみると、イロゴノミは完全否定されてはいない。「天の下の色好み」という表現も、

椰揄にはちがいないが、非難ではなく、少々ふざけ気味の親愛表現

と読んでいい。さらに、「みこのほいなし」として間接的に紹介される叔父の源融と昔男の交遊関係（一・八一段）を相補的に繋げば、

仲間うちのかだけた空気をより感じることができ

はずだ。有常が盟友なら、至は悪友といったところだろうか。三九段には、やわらかな時間が流れている。

四〇段は回想シーンだ。昔男がまだ親がかりの「若き男」だった頃、家の召使とおぼしき「けしうはあらぬ女」に恋する。しかし、親が反対して、その女を追い出す。昔男は血の涙を流し、悶絶。翌日、蘇生。召使の女に一途に惚れ込み、仲を引き裂かれると仮死状態にまでなってしまったという。

そして、末尾には、

昔の若人は、さるすけるもの思ひをなむしける。今の翁
まさになむや。

とある。昔男自身が過去を語り、今の自分を「翁」と呼ぶ構造。今でも遊んでいる不良中年が自らを「オジサン」と呼ぶ構造。自嘲などではない。イロゴノミな友たちとの歌語りの〈場〉を想定したい。そこで若い頃の激越なイロゴノミを語っている大人の昔男がいる。聞き手はわかっているはずだ。

「翁」がその「若き男」であることを。「昔の若人は……」は、三八段のアイロニーや三九段の椰揄にも通じる船晦の辞とされる。聞き手の存在こそ明示されないが、それを語り出せる〈場〉にすることに注目したい。イロゴノミを解する者たち

の「場」が、四〇段の「連帯」だ。

三八〜四〇段では、話の内容より、誰といるかということ
を重視してきた。その誰かとは、イロゴノミたちの暗語とも
いふべきアイロニー・揶揄・嘲諷を理解し得る相手または聞
き手たちだ。彼らとの「連帯」がまず第一に重要だ。

もちろん、話の内容からも「連帯」というテーマを読みと
ることはできる。昔男は、三八段では、会えないがゆえに「
恋」という感情を知り得た、と詠んでいたし、三九段では、
崇子の早世を気にもとめない至と対照的に、あくまで哀悼の
姿勢をくずさなかった。会えないことの悲しさを身にしみて
知っている姿が描かれている。それは若い頃に悲痛な離別を
経験したからだ、と四〇段が補足する。話の内容だけを見て
も、「連帯」を希求する昔男は確かに認められる。

しかし、その程度の繋がりを指摘するだけでは物足りない。
物語世界をより豊饒にする繋がりに注目し、さらなる読みの
深化をめざしたい。

四 「孤高」からの脱却

三八〜四〇段がイロゴノミ同好の士との「連帯」なら、四
一段は縁者との「連帯」、四二〜四三段は多情な女との「連
帯」と言えるだろう。四一段・四二〜四三段に共通するのは、
何もそこまで繋がっていないなくても、と思えるほどの昔男のあ

りようだ。三八〜四〇段を境にして、昔男は余裕ある大人に
変貌している。三八〜四〇段には、まるで悟りきったかのよ
うな雰囲気漂っていた。厳しく自己を問い詰め、他者に対
しても厳しかった昔男はもういない。四一〜四三段では、う
だつのがあがない義弟（妻の妹の夫）に対しても、信用でき
ない多情な女に対しても、繋がりをもちつづける。同レベル
のイロゴノミたちとの「連帯」から、さらに輪が広がってい
く。「孤高」からの脱却がより明確化しているのだ。

四一段は、

紫の色濃き時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける
の歌で有名な章段だ。貧しい男に嫁いだ縁者（妻の妹）を思
いやり、援助する。さらに、その夫には右の歌を贈る。渡辺
実『新潮日本古典集成』は、

貧しい義弟を物的に援助するとき、相手が抱くかも知れ
ない惨めな劣等感を、この歌は注意深く拭い取る温かさ
を有する。

と評している。従っていいだろう。縁遠い、しかも、うだつ
の上がらない者に対しても、優しい。一六段の有常に対する
援助なら、共感する間柄ということで説明できた。が、この
義弟はちがう。なんの取柄もない人物だ。そういう人物とも
繋がるというのは、まさしく「武蔵野の心」だ。今までには
見られなかった昔男の懐の広さが認められる。三九段におけ
る博愛主義的な惜別の情。四〇段における「翁」宣言。そし

て、この四一段。角も張りもとれていく昔男の姿がある。

つづく四二〜四三段では、はじめの四二段で、多情な相手との繋がりを断ち切れないさまを描き、次の四三段で、相手が多情でも結局は〈連帯〉を希求するさまを描いている。

四二段の本文は次のとおり。

昔、男、色好みと知る知る、女をあひ言へりけり。されど憎くはたあらざりけり。しばしば行きけれど、なほいとろしめたく、さりとて、行かではたえあるまじかりけり。なほはたえあらざりける仲なりければ、二日三日ばかり障ることありて、え行かでかくなむ。

出でて来し跡だにいまだ変らじを誰が通ひ路と今なるらむ

もの疑はしきによめるなりけり。

渡辺『集成』は、

女に対する男の感情の描写が、くどくどしい。『伊勢物語』としては珍しい段である。

と評価していないようだが、相補論では解釈が異なる。「くどくどし」さは、縁を断ち切れない逡巡をあらわしていると思われる。疑いながらも滅却できない〈連帯〉希求の心をあらわしていると考ええる。イロゴノミな女と言えは前稿「イロゴノミとして成長する昔男」でとりあげた二五・二八・三七段だが、そこでの昔男は、女のつれなさを嘆いたり、あるいは、逆に女を従えたりするだけで、逡巡してはいなかった。四二

段の「くどくどし」さは、四二番目という配列ゆえに描かれていると読んでおきたい。

四三段になると、昔男は、一端は思い切ったにもかかわらず、翻意して、多情な女と〈連帯〉している。プロットの繋がりがからすれば、逡巡の四二段の後にふさわしい章段だ。四三段の女は、親王の寵愛を受けてはいるが、別の男にも懸想されている。さらに、昔男とも関係をもっている。筋金入りの女だ。さすがに昔男も辟易するのだが、女の、

名のみたつしでの田長はけさぞ鳴く庵あまたとうとまれぬれば

という歌に翻意し、結局、

庵多きしでの田長はなほたのむわが住む里に声し絶えずは

というところに落ち着く。最後は〈連帯〉するのだ。一九段では不誠実な女を退けていたが、四三段にもなると丸くなる。かつての〈孤高〉は嘘のようだ。

五 過剰なまでの優しさ

四四〜四八段では離別の諸相を設定し、その時々々の心情を描いている。四四段では、これから地方へと下る知人の無事を祈念し、四五段では、昔男に想いを告げられずに死んだ娘を偲ぶ。四六段では、地方に下って長い友人に、

目かるとも思ほえなくに忘らるる時しなれば面影にたつ

と詠み、四七段では、昔男を「大幣のひく手あまた」と警戒して拒絶する女に対し、

大幣と名にこそたてれ流れてもつひに寄る瀬はありといふものを

と返す。四六〜四七段は、四四〜四五段のリフレインになっている。地方に下る、あるいは、下っている知人への思いやりと、昔男を想いながらも成就しない女への気遣い。このパターンを繰り返して、四八段（前出本文参照）で二つの系を統合する。三八段への回帰もしている。整った構成と言える。

四四〜四七段で注目したいのは、その過剰なまでの優しさだ。相手に注目したい。四四段では、「うとき人にしあらざりけ」る程度の人の安全を祈念する。四五段では、面識もないうまま他界した娘の喪に服す。四六段の相手は「片時さらずあひ思ひける」友人だが、地方に下って「対面せり月日の経にける」状況にある。にもかかわらず、昔男は「忘らるる時しなれば面影にたつ」と詠む。四七段では、昔男を警戒して離れようとする女に「つひに寄る瀬はありといふものを」と詠む。物的あるいは心的に遠ざかっていく者に対しても優しい。換言すれば、〈連帯〉の味を知り尽くした昔男だからこそ、離れゆく者に優しくふるまえるのだろう。昔男はここまで優しくなっているのだ。

六 結び

まだまだ先になるが、五九段において、昔男は一旦死ぬ。

昔、男、京をいかが思ひけむ、東山に住まむと思ひ入りて、

住みわびぬ今はかぎりと山里に身をかくすべき宿もとめてむ

かくて、ものいたく病みて、死に入りたりければ、面に水そそぎなどしていき出でて、

わがうへに露ぞおくなる天の河門わたる船の權のしづくか

となむいひて、いき出でたりける。

一度死んで再生するというこの話、一体どう解釈したらいいだろう。相補的に解釈すれば、丸くなりすぎたがゆえに一旦死んで仕切り直している、となる。五九段直後には、伊勢物語中最も残酷な六〇・六二段がくる（注8）。そこに登場するのは、一〜二〇段や二一〜三七段で田舎女に厳しく対応していたあの昔男だ。今回とりあげた三八〜四八段には、〈連帯〉に安息し、〈孤高〉から脱却する優しい昔男の姿があった（注9）。しかし、昔男は、その過剰とも言うべき優しさを五九段以降までひきずらない。一度死ぬことで甘さを拭い落とし、〈孤高〉の昔男へと回帰していく。

仕切り直しを必要とするほどの安息の日々。それは、一〜三七段における超克によって達し得た境地だったのだが、行き過ぎたのだろう。本稿ではそういう過剰さを見てきた。だが、私はこれを書き損じとは見ないし、成立段階の相違に起因する齟齬とも見ない。行きつ戻りつの人生を具現しているとする。一〜三七段の反動と読めばいい。つづく五九段の再生と六〇・六二段の制裁も、三八〜四八段の反動と読めばいい。

伊勢物語は繋いで読める。今回もそれを確信した。この読みの試みは最終の一二五段までつづく。愛知教育大学国語教室田口研究室ホームページ (<http://www.kokugo.aichi-edu.ac.jp/taguchi/taguchi.html>) にアクセスすれば、シリーズすべての論文と「早わかり伊勢物語成立論批判」を閲覧できるようにになっている。参照されたい。

注

- 1 風間書房から近日刊行予定の平安文学論究会編『講座平安文学論究第十四輯』に収録。
- 2 愛知教育大学「国語国文学報」平11・3。
- 3 福井貞助編『伊勢物語―諸相と新見―』平7・5風間書房に収録。
- 4 新典社から近日刊行予定の王朝物語研究会編『論叢伊勢

物語―本文と表現―』に収録。

5 しかも、成立論の段階分けの不確かさとも無縁だ。

6 実際、初原的部分と後補的部分を正確に区別できるものではない。その意味でも、成立論の段階分けからは離れるべきだ。

7 『歌語り・歌物語事典』（平9・2勉誠社）の「『色好み』関係章段」の項。

8 六〇・六二段の残酷さの背景については、「伊勢物語の〈モラル〉―美的規範あるいは補償行為としてのミヤビ―」（『日本文学』平9・6）に書いた。

9 四九〜五八段については別稿に譲る。
(たぐち・ひさゆき、本学助教授)